

床屋からへヤーサロンへ

島津忠夫

左眼の白内障の手術はすんでいるが、右眼の白内障が進んで来ているので、前と同様に上京して手術することに、十日ばかりは洗髪ができないから、いつもの散髪屋に行こうと思い、日曜だったので、時間の予約をしようと思って、電話帳に、その店の名前を探すが出て来ない。仕方無く猪名川町の電話番号を始めから繰って行くと、「へヤーサロンジョイ」として出ていた。そういえば、近くに美容院があるのに、女性の客が多いと思っていた。

子供の頃は「床屋」と言っていたことを思い出し、私たちの長年関わって来た『角川古語大辞典』を調べてみた。「床屋」といえば、式亭三馬の『浮世床』（初編文化十年刊）がすぐ思い出されるが、『角川古語大辞典』の「床屋」を引いて見ると、「髪結床かみゆひどし」に同じとして、用例には、

はふり子は床や也けり里神楽（『河衡』）

という句が上がっていた。『日本国語大辞典』を見たが、やはり同じ用例が出ている。『河衡』は文化十四年の俳書。この用例はなかなか見つかからず、やむを得ず『日本国語大辞典』

の用例を確かめたに過ぎなかったようだ。ところが、「髪結床」の方は、男の髪を結び、髭、月代さかぐさを剃る営業をした場所で、町内で家を構えている「内床うちどし」と、橋詰や空き地などで営む「出床でどし」があるとして、

かゝる所へ西橋詰の髪結床よりさばきかみのわかい者やうじくはへて来りしが（『堀川波鼓』）

という近松の用例を引いている。『岩波古語辞典』にも、『珍重集』の「髪結床の山の端の色」という西鶴の付句を引いている。その頃からごくふつうに使われた言葉だったと思われる。

『日本国語大辞典』の「床屋」は、①に「髪結床」として前述の『河衡』の用例を上げ、②に「理髪店」として、

僕は理髪舗（トコヤ）に行つて其れから湯に入つた（思出の記）

函館の床屋（トコヤ）の弟子をおもひ出でぬ耳剃らせるがごころよかりき（『一握の砂』）

と、徳富蘆花や石川啄木の明治期の用例を上げている。

その「理髪店」は、「理髪を職業とする店。理髪所。理髪床。床屋」として、

汚い理髪店、だるまでも居さうな料理店（『田舎教師』）
を上げ、「理髪床」には、「理髪店に同じ」として、
彼が馴染の理髪床にある西洋画（『多情多恨』）

を上げている。「多情多恨」は、尾崎紅葉が、明治二十九年二月から十二月にかけて「読売新聞」に連載した長編小説であり、『田舎教師』は、明治四十二年に書き下ろされた田山花袋の長編小説で、「床屋」↓「理髮床」↓「理髮店」の展開が考えられよう。「理髮」というのは、平安時代から見られる元服や裳着の時の童髪を成人の髪に結う式から用いられた古語であり、それが、江戸時代には、

柳にも理髮やしるきこみ鉢（『唐人躰』一）

など、単に調髪、整髪の意味に用いられていたのだった。

それでは、「散髪屋」はどうか。昔の侍は元結を結んだ髪型だったが、在俗の出家や、山伏・行者・学者・医者などは、月代を剃らず、髪を後ろへなでつけ、すそを切り揃えた髪型にしていた。それを「ざんぎり」といつていた。『角川古語大辞典』には、

其の身は遠所の山里にひつそくして、名を本立と替へて、かしらも散切に成り医道を心がけ（『武家義理物語』二・

一）

の西鶴の用例を上げている、それをまた「散髪」ともいつたのである。同じく『角川古語大辞典』には、

むかふより富士五郎（＝浜倉玄達）さんばつ、ほうけん

袴、広袖羽織、いしやの形りにて家来つれ出る（『傾城

正月の陣立』口明）

を用例としている。明治四年に断髪令が出て、散切頭の人間が目立つ世相を描いた作品に、歌舞伎の散切物などがあつた。遠い昔のことになってしまったが、昭和二十八年三月の大阪の歌舞伎座で、寿海の明石屋島蔵と勘三郎（先代）の松島千太による「島衛 月白浪」を観たことなどを思い出している。その散切頭を整えることを職業とする店が「散髪屋」なのである。『日本国語大辞典』には、

お清さんが露月町の方にそれはそれはいい男の散髪屋さんが居るつていふのよ（『暗夜行路』一〇）

の志賀直哉の長編小説の用例が上がっている。その業そのものは、

今と同じやうに、散髪を渡世としてゐる事が解つた（『硝子戸の中』）

の夏目漱石の用例があるから、「散髪屋」ももう少し前から見られるのだらうと思う。「斬髪店」という言い方もあつて、

此顛末を斬髪店の腰掛で見てるた節蔵の顔には、さげすむやうな微笑が浮かんだ（『灰燼』）

と、森鷗外が「三田文学」の明治四十四年から大正元年にかけて書いた小説が用例にあがっているが、その後はあまり用いられることなく「散髪屋」になつていったものと思う。

その「散髪屋」が今では「ヘヤーサロン」などと言われているのである。